

1 地域を支える医療ボランティアへの支援

■2012年8月下旬～9月下旬 訪問介護ボランティアの相互訪問

普段は9ヵ村でそれぞれ活動する訪問介護ボランティアがお互いの活動村を相互訪問。今後実施する研修を前に、お互いの強みや弱みを知り、改善策を一緒に考えるきっかけ作りになりました。



【左】お互い初めて、違う村で活動する訪問介護ボランティアの活動を視察。患者に対して、どのような質問をしているか、薬をきちんと確認したかなどを、チェックシートに書き込んでいるところ。

【下】全てのボランティアの訪問が終わり、みんなで振り返りを実施。今後、改善していきたい点を確認し合いました。



1 地域を支える医療ボランティアへの支援

■ 2012年9月下旬 エイズ治療法研修の実施 (1/2)

訪問介護ボランティア、ドロップイン・センターのボランティアを対象に、エイズ治療法研修を実施しました。どのようにHIVウィルスが体に影響を与え、治療薬がどうその進行を食い止めるのか、実践を交えて学びました。



【上】写真右の4名が、HIVウィルス。人間の細胞にどのようにウィルスが入り込んでくるかを、演じ実践をとおして学ぶ

【左】女性の身体の仕組みと機能を等身大のポスター絵に描く

1 地域を支える医療ボランティアへの支援

■ 2012年9月下旬 エイズ治療法研修の実施 (2/2)



【左】 普段は男の子にサッカーを教える担当の男性ボランティア。コンドームのつけ方を実践で説明

【上】 女性用コンドームの使用法を説明する訪問介護ボランティア



【下】 HIVテストを受けに行くと、なにを聞かれるのか？実演中。地域の人たちにHIVテストを受けるよう促すのも彼女たちの重要な役割のひとつ



3 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援

子どもの日 2012

JVCはリンポポ州ヴェンベ郡の3ヵ村で、ドロップイン・センターに対する支援を行っています。ドロップイン・センター（DIC）は、放課後に地域の中で子どもたちが安全に遊び、学べる場所を提供すると同時に、とくにエイズ遺児や親の出稼ぎで子どもだけで暮らす家庭など、困難な環境におかれる子どもたちを支えるために活動しています。JVCの支援する3つのセンターは、すべて地域のボランティアにより運営されています。



学期末の試験が終わったばかりの2012年12月7日に、JVCの支援するドロップイン・センターの子どもたち約130名が集まり、年に1度のイベントを開催しました。このイベントは、普段離れて暮らす子どもたちが交流することによって、支え合う仲間がいることを再認識することを目的としています。日々、子どもたちが準備してきた劇やダンスが披露され、1年間を振り返る楽しい時間となりました。

3 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援

子どもの日 2012



【左上】開会は、子ども代表のお祈りから。しっかりとした言葉で、イベントの無事を祈ります

【右上】ヴェンダの伝統的なダンスを披露。太鼓の音に合わせ、元気よく踊ります



【左】劇のワンシーン。服もボロボロで学校に行かせてもらえない子ども。いつも酔っ払っているお父さん。学校なんて女の子は行かなくていい！と、ぼっちゃりめのお父さん役の白熱の演技に笑いが絶えません。普段子どもたちが目にしている光景が劇に反映されています

3 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援

子どもの日 2012



【左上】南アで大人気のアパルトヘイト下の学生運動を映し出したミュージカル『サラフィナ』のワンシーンを再現する子どもたち。衣装もばっちり決まっています

【右上】ディベート合戦。トピックは「伝統的vsモダンライフ」。「そんな上半身裸じゃ、男の子にもてないよ」「こうして伝統的に尊敬を表すのが大切なよ」とやりとりが交わされます

【左】お昼ご飯は、みんなでバーベキュー



3 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援

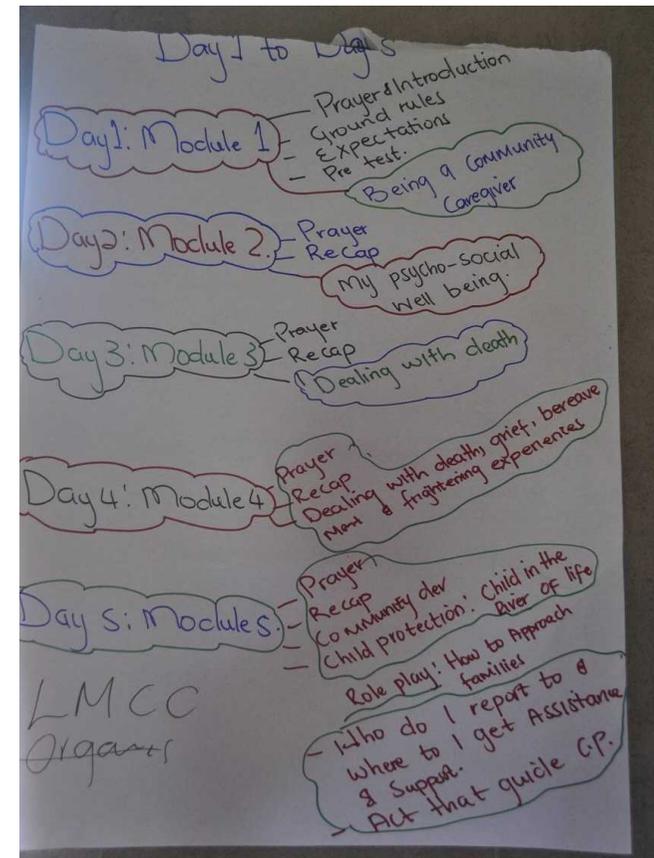
■ 2013年3月上旬 子どもたちにより良いケアを提供するために、研修を実施

エイズで親を亡くし子どもだけで暮らす家庭。里親との関係に悩む子、性的虐待が疑われる子どもなど、ドロップイン・センターにはさまざまな背景、課題を抱えた子どもたちがやってきます。少しでも、子ども足しの悩みを聞き、解決できるようにと、地域ボランティアとしての役割を見つめ直し、カウンセリングなどのスキルを学ぶ研修を実施しました。



【上】熱心に研修を受ける、子どもケアボランティア。全17名のボランティアが参加。

【右】5日間の研修プログラム



3 HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの支援

■ 2013年2月下旬 子どもたちにより良いケアを提供するために、研修を実施

ドロップインセンターに通う子どもたちのなかにはHIVに感染した子どももいます。また、若い世代への感染を防ぐためには、ボランティアたちがHIV/エイズそのものや治療法についての知識を身につけ、予防啓発活動を行っていくことが重要です。子どもケアボランティアを対象に、HIV感染経路や感染後の体の変化、ARV服薬法を学ぶためのエイズ治療研修を実施しました。



ARV（エイズ治療薬）の服薬方法について学ぶボランティアたち。

5 家庭菜園研修

地域で有機農業普及を担う人材を育成

■2012年9月～ 有機農法による家庭菜園研修の準備開始

今年度から実施予定の家庭菜園研修に向けて、以前JVCが提供した有機農業研修を受け、実践を続けているコマネさんをトレーナーとして迎え入れ、事前の調査を実施しました。水はどこから得ているのか？以前に農業をしたことがあるか？今後の研修を組み立てる上で必要な情報を、研修の対象となるパートナー団体のボランティアやHIV陽性者サポートグループのメンバー約90人から聞き取りました。11月にはこれをもとに研修を開始しています。



【左】ボランティアに聞き取りを行う、コマネさん

【右】すでに小規模で菜園を実施しているボランティアも。マガンゲニ村の地域菜園の野菜は、患者たちに提供されることもある



【右】子どもが作った菜園。ポドウェ村ではドロップインセンターの子どもケアボランティアが過去にJVCの研修を受けていて、センターに来る子どもたちにも教えている。野菜は子どもたちが家に持ち帰るなどして利用されている。



5 家庭菜園研修

地域で有機農業普及を担う人材を育成

■2012年11月～ 有機農法による家庭菜園研修開始

11月16日と23日に、活動対象9村の在宅介護ボランティアおよび子どもケアボランティアを対象として研修を開始した。初回は座学で、自分たちの食生活などを振り返り、研修を通じて学びたいことを確認し、各自が目標を立てるなどした。



【左】ボランティアに聞き取りを行う、コマネさん

【右】家庭菜園づくりの活動は現地パートナー団体・LMCCのスタッフ、フィリップさんにも手伝ってもらっている。彼は野菜はあまり作ったことはないが、主食のメイズ（とうもろこし）は100%自給している（南アフリカ人には珍しい。）



【右】普段食べている主食のポップ、ほうれん草、赤カブ、チキンが載ったお皿の絵を見て、「普段これらをどこから得ている？いくらかかっている？」といったワークショップを実施。自分たちの食生活を振り返り、家庭菜園づくりの意味を考えるとところから始めました。この結果を受けて、年明け（2013年～）から実地の研修が始まります。



5 家庭菜園研修

地域で有機農業普及を担う人材を育成

■ 2013年1月～ ファシリテーター養成研修

JVCは今までの経験を生かし、自然農法を使った菜園の普及に取り組んでいます。とくに、HIV陽性者や地域の子どもたちが栄養バランスのとれた食事を継続してとれるよう、そして貧困家庭の家計の支えになることを目指しています。すでに地域内で家庭レベルでの農業に取り組んでいる人びとを、今後JVCと共に活動する人材として育てるため、家庭菜園ファシリテーター研修を実施しました。



【上】研修参加者の家庭菜園を訪問。その改善策をみんなで考え、実行していきます。実践を通して、どう教えたら、伝えたらわかりやすいかをみんなで考えます。

【右】家庭菜園を普及していく上では、技術だけではなく、それがどのように生活を変えていく力をもつのかを伝える力が求められます。



お金を出して食べ物を買わなくても、自分で育てることができる。そして、健康にも環境にとってもその方が良い。それを多くの人に伝えていきたい。
～フローレンスさん（ポドウェ村）

5 家庭菜園研修

地域で有機農業普及を担う人材を育成

■ 2013年3月～ 自然農法を続けるJVC前事業地を交流訪問

JVCが以前に活動していた東ケープ州カラ地域を、現在の事業地で家庭菜園のトレーナーを務めるコマネさんとJVCスタッフが訪問。カラ地域で10年間の活動を経て培った経験から学んだこと、活動が普及していくきっかけとなった出来事などを聞き、今後の事業に役立てていきます。



カラ地域でトレーナーを務めたティムさん（中央）から話を聞く、コマネさん（左から2番目）。



研修の対象者だった女性たちが、今では地域の住民に有機農業を教えるようになりました。こうして、JVCの支援終了後も活動が根付いていることを目の当たりにしました。

5 家庭菜園研修

地域で有機農業普及を担う人材を育成

■ 2013年3月～ 自然農法を続けるJVC前事業地を交流訪問

3月までのファシリテーター養成講座を経て、4月からは各村、各家庭での研修を開始し、実践を広げていきます。4月には18名が参加して、まずは一村のドロップインセンターで研修を行ないました。



ドロップインセンターの敷地に菜園をつくりま
す。果樹なども植え、環境の整備も行いました。



ドロップインセンターに通う約50名の子どもたちも
研修に参加。今後、野菜や果樹の世話を子どもが担
当することになっていて、若い世代への技術の伝達
も期待されます。

(特活)日本国際ボランティアセンター